広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語とロシア語における慣用句の対照的研究 ： 身体語彙を扱った慣用句を中心に
Author(s)	トゥラグロブァ アイゲリム,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 19期 : 76 - 86
Issue Date	2005-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038848
Right	
Relation	

日本語とロシア語における慣用句の対照的研究
－身体語彙を扱った慣用句を中心に－

トゥラグロブァ・アイゲリム

第１章　　序論

1.1　「言葉は人間の発明したもののうちで最高のものである」
（ショシャール、吉倉‘言語と思考’p.14）

人間は常に情報を交換し、知識や技術を教え合わねばならないため、言葉は人間にとって生存に不可欠のものである。言葉がなければ今まで行われてきた諸発明はもちろん、歴史や文化も、社会も成立しえないといえる。

1.2　慣用句は言葉の中でユニークである

慣用句は比喩性を帯びている。つまり、句を構成する要素の意味が比喩的意味に転用されてしまうため、言語の現象として特別である。また、長い言葉で説明しなければならない必要がなくなる。そして慣用句は滑らかな会話の潤滑油のようなものである。

しかし、森田良行氏は日本語の「慣用的な言い方」についての理解度調査で留学生の誤解率が79.26%、日本人の学生は14.15%であることを報告している（森田良行1966)。このように慣用表現は外国の学習者にとっては日本語の文法や語彙の知識だけではその意味を十分に理解するのは困難なのである。そういうこともあって慣用表現を用いる際に、頻繁に誤解を犯さざるを得ない。しかし慣用表現は日常会話の中に用いられる頻度数が高いため、慣用表現を十分に理解することは重要な意味をもつものだといえる。慣用句の中には日常生活上のものから衣服、飲食物、建築、住居、身体などに関するものが沢山ある。身体部位は人間の生命にとって大事な役割を果たしている。したがって、世界のどの言葉でも身体部位に関する慣用句は多いようである。

そこで、このレポートは日本語とロシア語における慣用表現を比較ことによって、特に身体語彙を中心に、両言語の慣用表現の特徴を明かにすることを目的とする。

第２章　　慣用表現の定義と分類

2.1　日本語の慣用句について

一口に慣用句と言っても、定義や対象の範囲の据え方は、見解がまちまちであり、そう容易ではない。北原保雄・武田孝・他編集　(1981)「日本文法辞典」によると、慣用句というのは、二つ以上の語や文節が結合した結果、その一続きが、全体として構成要素である個々の意味の和とは異なった特定の意味を表すものである。また、宮地裕編（1982）は　慣用句とういのは、単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的堅く、全体で決まった意味を持つ言葉だという。そして例としてあげられるものは,　『油を売る』、『猫も杓子も』、『鼻が高い』、『足を洗う』、『間が抜ける』、『鼻にかける』などである。

日本語における慣用句は普通、大きく分けて連語成句的慣用句と比喩的慣用句の二つがある。

連語成句的慣用句は、ごく普通の一般連語句に隣接し、その境界線のはっきりしないところがある。以下例を挙げておく。『愚痴を言う』、『恰幅が良い』、『人目を盗む』、『電話をかける』、『電報を打つ』、『コンプレックスを持つ』、『パイプを通す』、『チャンネルを切り替える』などである。和語によるものが圧倒的で、外来語によるものはごく少ない。漢語によるものは数の上では両者の中間にあるが、「電話・電報・愚痴・印象」など、日常用語によるものが多く、漢文由来のものと感じられる「心肝を寒からしめる」「春秋に富む」などは、ごくすくなくなっているようである。

比喩的慣用句は直喩的慣用句と隠喩的慣用句の二つがある。直喩的慣用句は典型的には、「～（の）よう」「～（の）思い」などをともなって、比喩表現であることを明示するものを言う。例えば、『親船に乗ったよう』、『くもの子を散らすよう』、『雲をつかむよう』、『地獄で仏に会ったよう』、『死ぬ思い』、『血を吐く思い』、『雲つくばかりの』、『しなんばかりの』、『泣かんばかりの』などである。

隠喩的慣用句は語句の意味が派生的・象徴的になっていて、全体比喩的な意味を表すものである。『羽をのばす』、『側杖をくう』、『恨みをのむ』、『首ったけになる』、『馬が合う』などは典型的なものに属する。

2.2　ロシア語の慣用句について

日本語の慣用句と同じように、ロシア語の慣用句に関する定義はロシア学の専門家ごとに様々である。固定的語結合の全てを慣用句と見なすべきと主張する学者いる反面、固定的語結合の一部しか慣用句でないと考える学者も少なくないのである。

諺（poslovitsi）、言い習わし（pogovorki）、地口、冗句、助詞の一部（prisloviya）とか、付辞（gore-to, podi-ka　の -to, -ka の類）、名句、名言、金言（krylatiye　slova）などを慣用句として扱う言語学者もいる。

また、記述的構文や分析的構文（opisatelnye i analiticheskiye oboroty rechi）、合成接続詞（slozhniye soyuzy）、合成前置詞（slozhniye predlogi）、複合専門用語などを慣用句と扱う専門家がいる。

そして次のような語結合を単慣用句と呼び、慣用句の範疇に入れている学者もいる。例えば：gorbatyi nos（肉の鼻－団子鼻のこと）、tolstyi zhurnal（太った雑誌－厚い雑誌のこと）、rannee utro（早い朝－朝早く）、nervnoe litso（神経質な顔－緊張した、不自然な顔の表情のこと）　などである。

それからsumbur, abrakadabra, chepuha, erundistika, chush（どれも『無茶苦茶な話』を意味している）といった単語も慣用句と考えている専門家もいるようである。一般的に「慣用句」概念の定義の基準としてあげられるのは次のようなものがある。

１．固定性
２．意味的完全性
３．構造変化性
４．複製性
５．翻訳不可能性

また、慣用句は一般的に「転義性をもった語結合」や「慣用的な意味をもった固定的語結合」や「決まった句」と特徴づけられている。ロシア語慣用句の範疇に見られる特徴として次のようなものがあげられる。

１．常に語彙上の意味を持っている
２．構成要素には常に二つ以上の語がある
３．常に文法上の範疇がある

それからロシア語慣用句は構成されている要素が補助語であるとか、自立語であるとかにかかわらず、常に二つ以上の語から成立している。例えば： "delo v shlyape"（用事が帽子の中にある一用事がかたつけられてある）、 "pod muhoi"（ハエの下に一酔っぱらって）、"chuzhimi rukami zhar zagrebat"（他者の手で火を取り込む一人を使って取った利益を全部自分のものにする）、"ne solono khlebavshi"（塩も食べずに一御馳走をしてもらえずに帰る） などである。

このようにして、日本語の慣用句とロシア語の慣用句の定義には相違点がいろいろあるようである。ところが、両言語における慣用句の定義の共通点としてみられるのは、慣用句とは二つ以上の単語を強く結束させて使用するもので、本来の個別単語の意味とは異なる特別な意味の単語構造を持っている、ということである。

第３章　　研究の方法

本研究の方法としてはまず日本語とロシア語の慣用句の共通点を上のように捉え、日本語の資料は白石大二1969「国語慣用句辞典」、ロシア語の資料は L.A.Voinova, V.P.Zhukov, A.I.Molotkov, A.I.Fyodorov1978 [Frazeologicheskii slovar russkogo yazika] Moskwa,"Russkii yazik" を中心に両言語の身体語彙を使った慣用句の比較をする。その際、身体語彙の頻度数を調査し、両言語において顔にかかわる身体語彙を対象にする。そして日本語とロシア語、それら頻度数上位の身体語彙を扱った慣用句を比較し、両言語の相違点と共通点をまとめる。

第４章　　身体語彙が使われた日・露慣用表現の対照比較

4.1　使用頻度

亜細亜大学による「十四か国語の身体部位に関する慣用句の比較研究」というプロジェクトの結果は「目」を使った慣用句が世界の色々な言葉に結構あるということを証明したものである。その研究は、身体部位が使われている慣用句を十項目に、すなわち顔・頭・目・耳・鼻・口・手・髪の毛・足・身体のように分け、各パーツが言語ごとに全慣用句に占めている割合の調査を行われていた。日本語においては、「目」が使われる慣用句の数は圧倒的に多く、33.3％にのぼり、第一位である。また、資料として用いたロシア語慣用句大辞典にあげられている身体慣用句を調査した結果、用いられている身体部位とその頻度数は次のようである。

身体慣用表現の頻度別分布

慣用句数　571

	手	目	頭	足	鼻	耳	口
頻度数	152	125	117	80	40	35	22
順位	1	2	3	4	5	6	7

このように、日本・ロシア両言語において、「目」が使われる慣用表現が上位に据えている結果から、「目」に関しては、両語とも非常に重視されていることが分かる。

4.2　目ー"glaz"

人の目は毎秒400万ビットの情報を捉えるという。また、人は情報の八、九割を目から取り入れており、目は人間の器官として秀でた役割を果たしているのは確かである。

実際ロシア語には、目に関わる慣用句が多く、中には面白いものも少なくない。例えば、「Glaza - zerkalo dushi」という表現がある。文字通り『目は心の鏡』という意味で、ロシア人にとって目とは、心の状態を反映するものなのである。概して日本は人と話をする時、相手と目を合わせるのが苦手であるが、ロシア人は普通、相手の目をじっと見つめて話す。目をそらせて話しをするのはマナーとした失礼だし、心にやましいものがあるのではないかと思われかねない。「Glaza na glaza」（目と目を合わせて）という慣用句も、「一対一で、差し向かいで（話をする）という意味になる。

日本語にも目の慣用句が沢山ある。ところが、日本の社会では、自己主張よりも、集団の和を尊び、協調性が重視されることが多いようである。勢い、言われなくてもわかるはずだとかんがえる。このような社会では、口よりも「目でものを言う」ことが多くなる。

目による意思表示は、「目配せする」、「目をやる」、「目をつける」などで、それとなく目で合図するといった視線が特徴である。また、「目を配る」、「目を掛ける」、「目が届く」のように、相手へのまなざしの表現から気配り、配慮、世話の意味に転じたと思われる例もある。相手を直視しない傾向は「目を覆う」、「目をそむける」、「目をつぶる」、「目のやり場に困る」、「伏し目がち」などに現れており、

「人目を避ける」、「人目につく」、「人目をはばかる」、「人目を忍ぶ」といった世間の視線を気にする例も多く見られる。このような「目配せ」型・「視線回避」型の社会では、相手の意思をくみ取る高度な能力が要求される。また、「目が利く」、「目が高い」、「見る目がある」など観察眼の確かさが評価されるのは、弁舌の巧みさよりも見識を評価する精神風土があるからなのだろう。

また、「目を丸くする」、「目をむく」、「目が飛び出る」、「目を吊り上げる」、「目を三角にする」、「目くじらを立てる」など驚きや怒りの感情を表す際に、最も多く使われるのも目の慣用句である。

しかし、一方で、日本語とロシア語では共通するものをあげると、"Glaza ne men ` she govoryat, chem usta"（目は口のようにものを言う）というのがある。人の目を見て、気持ちや心の状態がすぐ分かるという意味を日本語では『目は口ほどにものを言う』と表す。

4.3　鼻ー"nos"

鼻は顔のほぼ中央にあって、呼吸と臭覚をつかさどる身体器官であることはすべての人間に共通しているが、そのとらえ方は民族によってかなり異なっている。日本語の鼻の慣用句は大きく二つに分けられる。一つは自慢やプライドを表す言い方で、「鼻にかける」、「鼻であしらう」、「鼻で笑う」、「鼻っ柱が強い」、「鼻息が荒い」、「鼻も引っかけない」などがある。もう一つは、それの対する反発や不満、軽蔑の言い方で、「鼻につく」、「鼻持ちならない」、「鼻をあかす」、「鼻を折る」、「鼻つまみ」などである。自慢した者とされた者が同じ「鼻」を使って言い合うわけである。現在よく使われる鼻の慣用句はほかに「においが鼻につく」、「鼻が利く」などがあるが、上の二つのグループ以外はあまり用例がないようである。

ロシア語にも鼻の慣用句が少 なくないようであるが、「鼻」に対するとらえ方は、日本人とロシア人では随分と違ってくる。例えば、居眠りでこっくりこっくりしている人を見て、日本人は「舟を漕いでいる」というのに対し、ロシア人は "klevat nosom"（鼻をつっついている）というふうに表現する。「すぐ近く」の意味を日本語では「目の前で」と言うが、ロシア語では "pod nosom"（鼻の下で）と言う。また、"sovat nos"（鼻を突っ込む）は「他人のことに口をはさむ、干渉する」の意である。つまり、日本語で「口出しするな」と言うところを、ロシア語では「鼻を突っ込むな」というふうに表現するのである。

一方、日本語とロシア語でほぼ共通する表現として "zadirat nos"（鼻を上げる）と

いうのがある。「威張る、ふんぞり返る」の意に関しては、日本語にも「鼻を高くする」という似た表現がある。

4. 4　口ー"rot"

日本語の口の慣用句は、「口にする」、「口に合う」など食べるという機能と、「口をきく」、「口を添える」、「口をそろえる」など話し方を表現する両方に使われ、舌の慣用句はあまり使われていない。中には、「口が滑る」、「口を割る」、「口が酸っぱくなるほど」といった、たとえがユニークなものもある。会議の席上で、「口火を切る」というと、その場の緊張感が伝わってくるが、この口火は元は火縄銃の火のことで、「口火を切る」は火薬に点火することを意味している。まさに論争の火ぶたを切るのにふさわしいたとえだとおもえれる。また、語源的におもしろいのは「口車に乗せる」である。一説に「乗る一乗せる」からの連想で車をたとえに持ってきたと言われている。

ロシア人のとって口は、主にものを食べたり飲んだりするための器官であって、音声や言葉を発する身体部位という意識は薄い。確かに、"vo ves rot"（口をいっぱいに開けて）「声をかぎりに、大声で叫ぶ」とか、"zastegnut rot"（口を締める）「黙り込む」等、「音声・言語」にかかわる表現もいくつかあるが、数としてはそれほど多くはないようである。そして音声や言葉を発する器官に関して、ロシア語では、「口」ではなく "yazik"（舌）という言葉を用いることが多いようである。例えば、「あいつはおしゃべりだ」というようなとき、"u nego dlinnyii yazik"（あいつの舌は長い）という言い方をするし、日本語の「口がきけない」も、ロシア語では "yazika net"（舌がない）と言う。「口を用いる慣用句は、やはり「食」に関するものが多いようで、例えば、"v rot ne vzyat"（食べ物が口に入らない）とは「まずくて食べられたものではない」という意味なのだし、"smotret v rot"（人の口を見る）は、「人がおいしそうに食べるのを眺める」という意味になる。

日本語と発想が共通する表現をあげると、例えば生活費を倹約するために子供を奉公や養子に出すことを、昔の日本でも「口減らし」といったのだが、ロシア語でも "lishnii rot"（余計な口）とは、「家族の、持て余し者」の意味になる。

4. 5　耳ー"uho", "ushi"

日本語の耳の慣用句は、様々な聞き方の表現が多くを占める。「耳にする」は最も

多く使われる慣用句であるが、ほかに、「耳につく」、「耳が遠い」、「耳を傾ける」、「耳を澄ます」、「耳に入れる」、「聞き耳を立てる」、「耳をそばだてる」、「耳をつんざく」、「耳を貸す」、「初耳」などがある。身体の慣用句を使った感情表現には、不快や不満を表す言い方が非常に多いが、耳の慣用句でも「耳を疑う」、「耳障り」、「耳に逆らう」、「耳が痛い」、「寝耳に水」など不愉快な情報やノイズに対する反応を表現する例が多く見られる。ロシア語でも耳の慣用句は聞くことに関わる慣用句は少なくないようである。しかし、ロシア語の『耳』の慣用句は特化され、次のように分けられる。

１．音楽の耳

例えば、"ushi rezhet"（耳を切る）下手な歌や音楽について『耳ざわりだ』という意味になる。

２．動物の耳を使った言い方

例えば、"medved na uho nastupil"（クマに耳を踏んつけられた）というのは「全く音楽が分からない、音痴だ」という意味である。「聴力を失った」の意味だと誤解しやすいが、実際はそうではなく、ここに言う「耳」とは「音楽の耳」のことで、ちょっとおどけて「音痴だ」というときに用いる表現なのである。クマが登場するのも、いかにもロシア的である。これに対し、日本語には動物の耳をたとえにした言い方はあまりない。あえてあげれば、「馬の耳に念仏」だろう。古くは「猫の耳に小判」とも言ったそうである。

３．『聞きたくない』という意味で

例えば、"ushi vyanut"（耳がしぼむ）という表現が用いられている。「あまりにもばかばかしくて聞く気がしない」という意味である。

聞くこと以外の意味で『耳』を使った慣用句

１．会えない

例えば、"ne vidat kak svoih ushei"（自分の耳のように見えない）というのは、「全く会えない、お目にかかれない」の意味である。鏡でも用いないかぎり、自分の耳は見えないもの。この句は、自分の耳が見えないのと同様、誰かも見えない、すなわち会うことができない、といった意味になる。共通する慣用句をあげると、例えば、人に

聞かせたくないときは、日本語には『壁に耳、石に口』、ロシア語にも"i u sten est ushi"（壁にも耳あり）といって話が漏れることを戒める慣用句がある。

4. 6　顔―" litso"

日本語の顔の慣用句には、大きく分けて次の三つの言い方がある。一つは人そのものを表現すう言い方で、「顔がそろう」、「顔を出す」、「顔つなぎ」、「顔ぶれ」などである。

二番目は、見栄や面目、名誉などを表す言い方で、「顔を立てる」、「顔をつぶす」、「顔が広い」、「顔から火が出る」などが代表的なものである。日本語の面目や面子の「面（つら）」は、もとは「頬（ほほ）」を指した語彙で、顔全体を対象としたものではなかったようである。「ふくれっ面」も古語ではふくらませた頬の意味である。しかし、現在では顔全体を指し、「面当て」、「面がまえ」、「面汚し」、「面の皮が厚い」、「どの面下げて」などはくだけた表現としてよく使われている。

三番目の言い方は、それらしい顔つきをすること。「得意顔」、「そしらぬ顔」、「知らん顔」、「何食わぬ顔」など顔の表現を表す言い方としてさかんに使われる。

ロシア語にも顔の慣用句がかなり多いようである。4.2 で述べたようにロシア人は人と話なしなどする時には相手の目とか顔をじっと見つめている。顔を相手以外のものに向けて、話しをするのは行儀として失礼だし、嘘などを言っているではないかと怪しまれかねないのである。それで、"litsom k litsu"（顔と顔を合わせる）「直面する」や "smotret v litso"（顔を見る）「せず立ち向かう」や "govorit v litso"（顔に言う）「面と向かって言う、まともに言う」といったような顔と顔との合わせを重視しているのが目立つ。また、"litsa net"（顔がない）は、驚きや恐怖などが原因で「顔面蒼白だ」の意味で、日本語「合わせる顔がない」とは全く違う。この意味のロシア語は "s kakim litsom yavitsya"（どんな顔をして現れろと言うのか）という反語的な言い方をし、結局「顔を出すのが恥ずかしい、合わせる顔がない」の意味になるというわけである。

日本語とロシア語ではほぼ発想が共通している表現として、"na litse napisano"（顔に書いてある）というのがある。人の性格や性質などが「表情に表れている」という意味なのだが、例えば、"na litse Kati napisana dobrota" とは、「顔を見れば、カーチャの善良さが書かれている）とは、「顔を見れば、カーチャが善良な人であることは一目瞭然だ」ということである。

第５章　結論

以上、日本語とロシア語における身体慣用句の「目、鼻、口、耳、顔」を構成要素とした語彙が他の語と結合することによってどんな慣用句の表現が作られるかを意味の上で検討をしてみた。

身体部位は状態が変化するために、身体語彙で構成された慣用句もこれと関連して比喩的に使用されることが多い。一般的に言えば、個人の感情、気持ちの変化がよく現れているものとしては「目」で悲しみと驚き、嬉しさ、怒りなどを表し、「口」は表情を通じて個人の行動と態度を表したりする。また、「口」はものを言うところから意見や話し方に食べ物を食すところから食性の意味に「口」の機能と同様に用いられている。「耳」は様々な聞き方の表現に使われる。「鼻」は自慢やプライドなどを表している。「顔」は人そのものや見栄や名誉、面目や面子を表現する言い方が多い。
以上のように身体語彙で構成されている慣用句は多くが身体語の中心的意味がもとになり、多様な比較てき意味を表しているため、その数も非常に多い。

しかし、両語間の身体慣用句の対照においては、身体部位の素材が、必ずしも同じように使用されていないことが、明らかになった。人間の性格、性質、振る舞いに関して同じ内容を表すのに、日本語の慣用句ではある決まった身体部位が使用されているのに、ロシア語ではその素材が使用されていなかったりする。そのような違いの中に、また、両国民の言語感覚、生活感覚の違いを見出すことができるし、その背景となる自然環境や生活様式の類似点と相違点を考察することができた。

最後に、この身体語彙を扱った慣用句について調べてみたが、日本語を外国語として学習している者の為に役に立てばと思う。

参考文献

亜細亜大学慣用句比較研究プロジェクト編　1998「目は口ほどにものを言うか？」三修社

川鴨　優　2002　「ちびまる子ちゃんの慣用句教室」集英社

L.A. Voinova, V.P. Zhukov, A.I. Molotkov, A.I. Fyodorov 1978　[Frazeologicheskii　slovar russkogo yazika]　Moskwa,　"Russkii yazik"

倉持保男　　阪田雪子...（編）1999「慣用句」三省堂

宮地　裕　1982　「慣用句の意味と用法」明治書院

宮園正光　1999　「慣用句の意味と使い方」明治書院

西村孝夫　1995　「文化構造論序説」啓文社
白石大二　　1969　「国語慣用句辞典」

資料

L.A. Voinova, V.P. Zhukov, A.I. Molotkov, A.I. Fyodorov 1978 [Frazeologicheskii slovar russkogo yazika] Moskwa, "Russkii yazik"
白石大二　1969　「国語慣用句辞典」